九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代アメリカ大手銀行グループの特質 : OTDモデルの形成過程を中心に

掛下, 達郎

https://doi.org/10.15017/1500487

出版情報：九州大学, 2014, 博士（経済学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名	掛下 達郎
論　文　名	現代アメリカ大手銀行グループの特質 ―OTD モデルの形成過程を中心に―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　川波　洋一 副　査　　九州大学　　教授　　稲富　信博 副　査　　九州大学　　教授　　岩田　健治

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

アメリカでは、1980年代ころから、貸付債権を証券化する動きがあらわれ、大手銀行もこれに　積極的に関わるようになった。こうした業務はOTD（originate to distribute=組成分配型）モデ　ルと呼ばれ、近年その実態や意義について論じられるようになった。本論文は、大手銀行が証券　子会社設立等のグループ化を通じてOTDモデルを形成していく過程を、両大戦間期から戦後にか　けての金融業の実態にまで遡って解明しようとしたものである。

本論文の貢献は、以下の二点にまとめることができる。第一は、OTDモデルが証券化のための基盤やそれに先行する業務の段階的な導入を踏まえて形成されたことを明らかにした点である。本論文では、特にフェデラルファンドを通じた証券決済、ノン・リコース・ファイナンスにおける債権の限定的な遡求、ローン・セールを通じた債権の売却とバランスシートからの切り離しといった事態がそうした基盤として重要な意味を持っていたことが、強調されている。第二に、本論文は、大手銀行グループにおける収益構造や収益源泉の分析を通じて、現代アメリカの金融システムにおけるOTDモデルの普及の実態を明らかにしている。証券化の下では、大手銀行グループの業務はオフバランスシートにおいても展開され、その収益源が多様化していった。これは、大手銀行グループにおいてOTDモデルが定着していった事実を収益構造と収益源の分析を通じて確認する作業である。

以上のように、本論文は、OTDモデルを、商業銀行の持つ強みを活かしながら傘下におく投資銀行等を通じて金利収入以外の収益源を追求する特異な仕組みとして明らかにしている。確かに、本論文においては、他国の実態との比較や今後の金融システム改革に持つ含意等さらに追究すべき課題は残るが、これらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上の理由により、本論文は、博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。